何を仰山な叉ばかり、あれは皆戯言なるをと、いへどふたゝび押返して、夫でも皆あのやうに、評判して居てじやもの、おまへの正室に、なつた御方は僥倖な叉じやとて、笑わんしたゆへ、さあその僥倖なが、おまへの気にかゝる歟。そんな世話よりこの寒さに、足さいて巨燵へ、あたつたがよいといひざまに、和君の手を取引寄て、それ今いふたが、嘘か実か試なされと、火燵の中でしつかりと、握らした陽幹を、どふいふ意か手も引ず、櫓の角へさしうつぶき、顔を隠さんした其時は、日頃の壮夫づくも、義理も恥辱も打忘れて魂は

真暗闇、おまへの腰の処を、取て引寄たるに、十三が方へ指さしせさんしたも、巨細構はず其侭に、股間へ手をさし入ると、表の戸が鳴が一時、連中が戻つて来た。手持わるさにそら寐入、終にわや〳〵引起され、意残れど戻つたは、はや三更過なるべき歟。かくて其翌日から、一しほ想ひが増まひものか、おのれ何とかせば、なる恋であらふものと、左さま右さま思へども、栄三が手まへ間男などゝ言れては、畜生の名を取て、互に済ぬ男づくと、堪忍べばいよ〳〵猶、忘れかねたる悪因縁、ふつと浮んだ悪性根、巧出せし和君への悪